(2014/09/06)

『資本論』を通して見る世界経済と日本資本主義の現状

中央大学名誉教授　高田太久吉

Ⅰ.『資本論』の資本主義観――マルクス経済学のイデオロギー的基礎

(1)資本主義の歴史的性格

マルクスの弁証法的な歴史観――社会体制の発展と衰退

階級闘争の歴史としての社会史（人類史の前史）

生産力の発展と資本主義の文明化作用

資本主義体制の変革――可能性（矛盾）と条件（生産力の発展・階級闘争・民主主義）

(2)資本主義の階級関係――資本と賃労働

階級的搾取の体制としての資本・賃労働関係

「価値増殖」する価値としての資本

労働力の商品化と剰余価値生産（資本の支配下での剰余価値の生産と領有）

企業と労働組合

(3)資本主義の構成原理

一般的基礎としての私的所有と社会的分業⇒商品生産（交換目的の生産）

資本主義的商品生産と価値法則（使用価値と交換価値）

資本の競争と平均利潤・生産価格――資本運動の規制原理

利潤と利子、剰余価値の諸形態

機械と失業、あるいは、生産力の発展と相対的過剰人口・貧困

(4)資本主義の終焉と将来の社会体制

資本の価値増殖と「資本の限界」――資本の過剰蓄積、資本の絶対的過剰

資本主義の矛盾の現れ方――競争、不均衡、利潤率低下、恐慌、失業、階級闘争、政治危機

「資本主義の枠内での資本主義の否定」

株式会社、国有企業、福祉国家、「社会による強制」

コモンズ

協同組合、非営利経済組織

階級的搾取の廃絶、経済過程の社会的・計画的制御、社会主義

計画経済・国家機能の肥大化・官僚主義　vs　民主主義・個人的自由

Ⅱ．マルクス経済学の理論的要点

(1)古典派経済学の批判と克服

古典派経済学の階級的性格――産業資本、分業論、労働価値説

価値法則と市場メカニズム――競争と自動調整メカニズム、貨幣の役割、恐慌

資本の概念規定（価値増殖する価値）、可変資本と不変資本、資本の有機的構成

利潤の源泉としての剰余労働、剰余価値の諸形態

生産力の発展がもたらす文明化作用、資本の集中、失業と貧困

(2)剰余価値論と搾取論――階級的搾取の体制としての資本主義

労働と労働力の区別、労働力商品の価格としての賃金

生産過程と交換過程（価値の生産過程と実現過程）

生産的労働と不生産的労働

生産力の発展と搾取率の上昇（剰余労働の相対的増大）

産業予備軍と賃金――消費の制限、生産と消費の乖離（実現問題）

(3)再生産論と資本蓄積論――資本主義経済あるいは総資本の運動論

資本・賃労働関係の再生産――資本制生産関係の持続性

資本の循環・回転と再生産――資本の３形態、実物資本と貨幣資本、生産と流通

利潤の再投資と資本蓄積――拡大再生産、経済成長

資本の過剰蓄積、競争、過剰信用、利潤率低下、価格変動、再生産のかく乱

資本の集積と集中、独占、超過利潤（レント）

(4)資本主義の矛盾と恐慌――資本主義の限界

『資本論』体系（プラン）における恐慌論の位置付け

恐慌の「原因」としての資本主義の矛盾――「内的に一なる契機の自立化と乖離」

過剰生産・過剰蓄積の動因としての資本の競争

再生産の限度を超えて過剰蓄積（過剰生産・過剰投資・過剰取引）を促進する信用制度の役割

過剰生産恐慌と独自の貨幣・金融恐慌

恐慌の周期性、産業循環と恐慌、恐慌と革命運動、恐慌と帝国主義戦争

19 世紀末「大不況」と恐慌の形態変容、長期波動論

Ⅲ．世界恐慌と世界経済の現局面――新自由主義・グローバル化・金融化・ＩＴ化

(1)「今回の恐慌」はどのような恐慌だったのか

（形態）貨幣資本の過剰蓄積が引き起こした独自の金融恐慌

（導引）不動産バブルと新しい形態の証券バブルの崩壊

（崩壊のメカニズム・パニック）シャドーバンキング・レポ市場の急膨張と破綻

（波及プロセス）米国を震源とし、国際資本取引の逆流を介して欧州に波及した国際金融恐慌

（信用・架空資本市場）新しい架空資本としての金融デリバティブ

「マネーマネジャー資本主義」（ミンスキー）に特有の金融恐慌⇒世界不況

(2) なぜ過剰生産ではなく、バブル崩壊、通貨・金融危機、財政危機が頻発するのか

新自由主義のもとで労働生産性と賃金が乖離――低成長下の高利潤・企業の内部留保

財政膨張・継続的な金融緩和・国際不均衡（ドル垂れ流し）による「過剰流動性」

貨幣資本の過剰蓄積――不平等・格差拡大、富裕層と機関投資家、継続的バブル＝架空資本市場の膨張

経済の金融化と金融の証券化――株主価値重視、M&A・バブル投機依存型の企業活動

架空資本市場の膨張と収縮、レバレッジサイクル、金融恐慌から世界不況・長期停滞へ

(3)新自由主義とは何か――資本の権力と利潤の回復をめざす階級的プロジェクト

イデオロギー的基礎――自由主義・個人主義・「企業原理主義」

経済理論と経済政策――新古典派経済学（一般均衡論と方法論的個人主義）、新古典派経済学の主流となったモダン・ファイナンス論（架空資本の経済学）

新自由主義の政治的影響力を支える社会的装置――保守・財界系シンクタンクと大学・メディア

世界恐慌と新自由主義の帰趨――「企業原理主義」vs「社会による強制」

(4)現代資本主義の主要な矛盾の表れ

過剰生産に代わる「過剰流動性」、過剰生産恐慌に代わるバブル崩壊・金融恐慌

（先進国の）資本蓄積率の低下、低賃金・失業・格差・貧困・ブラック企業

格差・不平等・競争が増幅する社会の経済的・イデオロギー的分裂・政治不安

租税国家の危機と財政危機――景気政策、大企業・富裕層減税・タックスヘイブン

自然環境・生活環境の危機――地球温暖化、原発の拡散、資源・エネルギー・食糧問題、「社会的共通資本」の民営化
国民経済の危機、グローバル化・財政危機、マクロ不均衡、経済政策の限界

国際不均衡、国際紛争・内戦の深刻化、経済の軍事化、軍需依存の技術革新

Ⅳ．日本資本主義の矛盾とアベノミクス

(1)バブル崩壊と「失われた２０年」――対米従属・輸出依存型成長の限界

1990 年初頭バブル崩壊の特異性――地価・株価バブルと銀行信用膨張の連動、米国の国債管理政策への協調⇒プラザ合意による撹乱、ジャパンマネー流出⇒アジア危機
1970 年代スタグフレーションと世界経済の構造変化、対米輸出偏重による対応の遅れ

「内需拡大」政策の不作為、対ドル外交政策の不作為、財政危機への不作為

(2)日本資本主義と日米関係――経済・外交政策の制約

プラザ合意以降の米国の対日経済要求と日米経済交渉（構造協議）

日本のアジア経済外交の混乱と不透明な TPP 交渉

ウォール街と投機ファンドに翻弄される金融市場・産業再編

米国のエネルギー・食料・核開発政策に従属したエネルギー・農業・原発政策

(3)グローバル化と日本資本主義

東アジアの経済成長と日本資本主義の構造転換・経済外交政策の不適合

日本企業の多国籍化（海外投資の加速化）と国民経済の矛盾

新自由主義と雇用破壊が必然化する内需縮小と財政危機

マクロ不均衡（国際収支、財政収支、通貨管理）と政策手段の制約

(4)財界主導の「成長戦略」＝アベノミクスの狙いと危険性

野蛮化する新自由主義による国土と資源の食い潰し、雇用破壊による利潤維持

「国際競争論」「外資吸引論」「アジアの成長取り込み論」に依拠した大企業優遇政策
金融改革なき「異次元の金融緩和」、産業政策なき「開発政策」、財政改革なき税制改悪

トリクルダウン景気回復論の虚妄

まとめ——アベノミクスに代わる日本資本主義の展望

グローバルな視野にたった教育政策と教育投資、研究開発投資

地方分権と地域循環型経済モデルの可能性、第一次産業の活性化、協同組合の活用

新しいディーセントな労働機会の創出・産業政策、労働組合の復権、最低賃金引き上げ
長時間・不払い労働の禁止

大企業、富裕層への適切・実効的な課税、格差是正策、金融投機の規制

国民生活の目線にたった社会インフラ投資、社会福祉政策の充実、中・高年の人材活用

以上の政策を通じて、社会的過剰資本の社会的活用、大量の若年労働者の雇用保障、社会福祉政策に必要な人と資金を確保すること。

参考文献

高田太久吉『金融グローバル化を読み解く』（新日本出版社）2000 年。
-------- 『金融恐慌を読み解く』 同上 2009 年。
-------- 『現代資本主義とマルクス経済学』 同上 2013 年。

なお、「資本の過剰蓄積」「貨幣資本の過剰」「経済の金融化」「金融の証券化」「シャドーバンキング」「デリバティブ市場」「2007～8 年金融恐慌と世界不況」「新自由主義」「欧州金融・財政危機」その他個別テーマについての報告者の見解については、ホームページ http://www.takuyoshi.sakura.ne.jp に公表している論文、報告レジュメ、資料その他を参照していただきたい。

他に、

友寄英隆『アベノミクスと日本資本主義——差し迫る「日本経済の崖」』（新日本出版社）2014 年、を推薦しておきたい。